
とあるおたくの一日

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるおたくの一日

【Nコード】

N9659J

【作者名】

しんどろみずき

【あらすじ】

ある雪の日、段ボール箱が届いた。
受け取ったのは絵にかいたようなオタク。中に入っていたのは、びっくりするほどの美少女で……。

届いたものは……。 (前書き)

少々、過激な表現がありますが、15禁のタグはつけなくてもいいと判断いたしました。

もしもいやな方がいらっしゃいましたら、予めご了承ください。

届いたものは……。

狭いアパートの部屋の中央におかれたパソコンが唸りをあげ、小太りの男がキーボードをせわしなく叩いていく音が響いている。万年床となったベッドの上には等身大の抱き枕が横たわっており、壁に飾られた幼い顔立ちのキャラクターとともに男を見下ろしていた。男の名前は長峰泰司^{ながみねやすし}という。

額に浮かんだ脂ぎった汗。パソコンの画面を一心不乱に見つめ、うすら笑いを張り付けながら文字を打ち込んでいく姿は、まさに「オタク」と称されるものであった。いや、正確には「ヲタク」と表記するべきであろう。

長峰のもとに人が訪れることは滅多にない。彼は高校生のころからインターネットの掲示板とオンラインゲームに熱中し、リアル友達なんていない、という思想に至ったためだった。そのため部屋の掃除をするのは二カ月に一回程度。それもネットの書き込みに触発されて、やってみるかという気持ちになったときだけである。

今はアパートの周囲が雪に埋もれるほどの寒さであるが、夏になると男自身からでた体臭と、適当に放置されたゴミから発せられる酷い臭いのせいで近所から苦情が来ることが何度かあった。

人付き合いの少ない長峰は注意をしに来た隣人を見て、当たり前のように困惑した。そして混乱した。

隣人の言ったことはせいぜい「ゴミが臭いのでちゃんと処分してくれ。こちらにまで被害が及んでいる」といった程度なのだが、長峰はコミュニケーション能力の欠如というコンプレックスのために被害妄想に陥った。隣人の態度がとても横暴で、書き込みでしか目にしたことのないような理不尽なクレームを受けているものと勘違いしたのだ。

実際にそんなことはないから、些細な問題であるのに口論へと発展し、どもりながらよく分からない理屈を並べ立てる長峰を大家が

なだめなければ、裁判沙汰になっていたかもしれない。

「お、お、おれがゴミを出そうが、が、出さなくても、お、お前には関係ない！ 権利のし、侵害だ！」

などと言いつける長峰を、経験豊かな白髪の大家はゆっくりと諭したのだが、長峰の興奮は収まらず、

「お前の個人情報 ネットで、ば、ばらまいてやる。す、す、すぐに大変なことにな、な、なるぞ」

と叫びながら部屋に押し込まれた。

それからすぐに隣人は引っ越したが、公共の迷惑となるためゴミだけは捨てることになった。長峰の人間不信はさらに強くなり、一連の事件をかなりの誇大表現とともに投稿したものの反応は薄く、不満ばかりがくすぶる結果となった。

以来、アパートの住民からは避けられるようになり、豚に似ているからという理由でトンコツというあだ名もついた。近所のこどもが時々、お化け屋敷のような感覚でいたずらを仕掛けるのもうんざりとしていた。

職もなく、童貞でブサイクな自分を底辺の存在だと思っていた長峰は、親からの仕送りで生計を立てている。幸いなことに両親が暮らしに困らない額を供給してもらっているので、オンラインゲームの有料コンテンツと同人誌の購入にも惜しみなく金を使っていた。

一日中パソコンの前に座っているうちに、ゲームの中ではある程度名前が通るようになっていた。長峰は気を良くしてどんどんオンラインの世界にのめりこんでいった。気づけばいつのまにか29歳になっていた。

記録的な大雪が降りつもる1月23日、男は昼過ぎになってようやく起床した。深夜に活動が活発になり、日が沈んでいる間はずっとネットに集中していたためだ。昼夜がすっかり逆転し、普通の人とは反対の生活を送っている。

いつものように2チャンネルへ向かい、乱立するスレッドを眺める。めばしいものはなかった。夜になれば段々と勢いを増してくる

のが常だから、昼間はたいていこうだ。

剣と魔法の世界を基調にした、狩りを楽しむオンラインゲームにログインし、長峰はギルドの様子を確認した。開設当初から参加している長峰はとある巨大ギルドの副マスターであった。仲間というよりは部下に近いメンバーが百人近くいるのは、一種の快感である。現実世界で底辺に甘んじているからこそ味わえる頂があると、長峰は常々思っていた。有料コンテンツを使えば、簡単に装備を強化することができる。あとは時間をかけるだけなのだ。好きに使える時間があるからこそ、オンラインゲームに集中することができるのだ。

「ガイオンさん、こんちはっす」

ガイオン、というのは長峰が使っているキャラクターの名前だ。かなりセンスのあるイカした名前だと思っている。話しかけてきたのは同じギルドの新人で、長峰の足元にも及ばないくらいの雑魚だ。挨拶は無視するのが格好いいと信じている長峰はひ弱そうな新人の隣を素通りし、フィールドへと向かった。ここですばらく暇つぶしをするつもりだった。今日は大事なイベントがあるのだ。リーダーとの打ち合わせは昨夜のうちに済ませている。集合時間まではもう少し余裕があった。

雑魚モンスターを軽く蹴散らしながら、ダンジョンの奥へ進んでいく。ボタンひとつで吹っ飛んで行ってしまうようなやつとは、戦っても意味がない。爽快感すら覚えない。事務的な作業だった。

玄関のチャイムが鳴る。

通信販売で頼んだものが届いたのだろうか。長峰は首をかしげながら重い腰を上げた。この前注文した同人誌はすでに受け取っているし、懸賞なども応募した覚えがないからだ。

ひよつとしたらエロサイトの請求書が来たのではないかと考えたが、長峰は首を振った。無料のところばかりを選んで、まわっているからだ。危ない橋を渡るようなことはしていない。

もう一度チャイムが鳴る。はいはい、わかってますよ。

ドアを開けると、宅配便の制服を着た青年が、大きな箱を携えていた。

「長峰さんですか？」

「はい、そうですけど」

声がかすれた。

肩や頭に雪を乗せた宅配員は、笑顔を絶やすことなく紙を差し出した。

長峰は印鑑を取り出し、ハンコを押すと、段ボール箱を受け取った。意外に重くて尻もちをつきそうになりながら部屋に運び込む。

変なものが入っていたら、ネタにして掲示板にアップしようと画策しながらガムテープをやたらめったら剥がしていく。小気味よい音とともに、中身が正体を現した。

「……ひゅ？」

とんでもなく変な声を出してしまった。

どうして美少女が入っているのだ？

体育座りで青い髪をした少女が、段ボール箱に入れられて運ばれてきた。

ダッチワイフ、という言葉が最初に浮かんできた。

要は性欲を発散させるための精巧な人形のことなのだが、とくに人間に近いものをラブドールという。近くでも見ても本物かどうかわからないくらい作りこんであるから、この少女も人形かと思ったのだ。何かの間違いで購入してしまったのだらうか。

とりあえず取り出してみようと、両脇を抱えてベッドの上に運ぶすでに寝かせてある抱き枕と並べると、美少女が二人も待ち構えているようだった。

薄気味悪い笑みが口元に浮かぶ。

まるで無力な獲物を前にした野獣のように本能だけで作られた表情だ。

青髪の少女は大きな瞳をぱちりと開くとよくわからない悲鳴をあげながらあとずさり、すぐ後ろにあつた壁にぶつかった。必死に両手を振りまわし、状況がつかめないでいる長峰を近づけないようにする。

長峰もようやく正常な思考を取り戻したのか、ほおをつねって夢ではないことを確認した。頬の肉は厚く、脂ぎっていた。

「え、あ、……」

長峰は何かを言おうとしたのだが、言葉が出てこない。

その代わりに発せられたどもり（・・・）は、長峰の自己嫌悪を呼び起こした。

こんな美少女がリアルで目の前にいるのに、おれは何をしているんだろ。こんなシチュエーションは何度もエロゲで体験したではないか。

高校時代、クラスの女子に「マジきもい。さっさと死ねば？」とさげすまれ続けたトラウマが長峰をむしばんでいく。女はこわい。女なんてろくなものじゃない。敵だ。

少女はなおも叫ぶのをやめない。

このままでは隣人に気づかれるかもしれない。また厄介事が起こるのは御免だった。少女を黙らせなければ。

この少女が勝手に入ってきてわめくからいけないんだ。住居不法侵入罪だ。おれは悪くない。正当な行為だ。そういう風に言い訳を考えると、だんだん勇気がわいてきた。

もしかすると、という妄想が浮かんでくる。どさくさにまぎれて、あんなことやこんなこともできるかもしれない……。

長峰はそう叫ぶと、ベッドの上で暴れている少女に飛びかかった。運動してないとはいえ、大人の男と華奢な少女では力に差がありす

ぎた。

腕をつかむ。

やわらかく、すべすべした感触だった。

空いたもう片方の手で口をふさいだ。唾液が少しついた。長峰の心臓はいまだかつてないほど激しい鼓動を刻んでいた。

女の子とはこんなに気持ちがいいものなのか。

青髪の少女はジタバタと足を動かし、なんとか長峰の背中を蹴ろうとしていたが、馬乗りになった長峰が鼻息荒く顔を近づけてくると、さらに必死になって抵抗した。もがくたびに長峰の手に吐息がかかり、彼の興奮を誘った。

「お、お、お前がつ、わ、悪いんだぞ！」

びっくりするくらい大きな声が出た。

太ももに当たる胸の感触が、長峰の理性を吹っ飛ばした。

まるで肉に群がる犬のように、顔のあらゆるところへキスをする。少女の抵抗がさらに激しくなると、それに合わせるように長峰の接吻も乱暴なものへと変わった。

胸をもむ。信じられないくらいにやわらかい。ここをまさぐっていれば、そのうち気持ち良くなって少女も観念するだろうと長峰は思っていたのだが、現実は大きく違った。

少女が長峰の左手にかみつく。長峰はあつ、と叫ぶと指をおさえた。

次の瞬間、長峰は少女の頬をはたいていた。

……………うそだろ。

自分の右手を茫然と眺め、長峰はつぶやいた。人なんて殴ったことがなかった。手のひらは赤くなり、ヒリヒリと痛んだ。

手の先に冷たいものが当たった。

少女の涙が、ぼろぼろとこぼれていた。

「……………う、ひつく……………」

静かに嗚咽を漏らし、少女は泣き始めた。長峰の獣のような性欲はどこかへ消え去り、とほうもない罪悪感ばかりが湧き上がってくる。

る。

おれは何をしていたのだ。この少女を犯そうなんて、そんな卑劣なことを真剣に考えていたのか。

脱力感に襲われ、ゆっくりと少女から体をどける。膝を抱えて涙を流す少女を横目に、長峰はひどくばつの悪い気分だった。

パソコンが唸りを立てている音と、低めに設定された暖房の吐き出される音になっていた。

「え、あ、あの——ごめんなさい」

長峰の頭には、謝ることしかなかった。

警察沙汰になったら困るし、騒ぎになるのも嫌だった。なにより、いたいけな少女を泣かせてしまったことに嫌気がさしていた。

「……………」

少女は答えない。

「い、いきなり来たから、び、び、びっくりして——とんでもないことを」

「……もう、私のこといじめない？」

しゃくりながら少女が尋ねた。

「は、はい」

「ほんとうに？」

長峰は大きくうなずいた。

「……じゃあ、もうちょっと離れて」

ベッドとは反対側の壁まで長峰が下がると、少女はようやく少しだけ警戒心を解いたようだった。

観察するように長峰をじっと見つめ、涙をぬぐう。

「なんであんなことしたの」

「え？」

「いきなり抱きついてきた」

「え、あ、それは……き、君がいきなりひ、悲鳴をあげるものだからびっくりして……」

「だからやったの？」

「す、す、すみま、ません」

少女はまだ気を許したわけではなさそうだったが、長峰の言葉を聞くと、ふっと肩の力を抜いた。

「悪気はなかった？」

「ありませんでした」

「じゃあ、許すわけじゃないけど——ひとまずは勘弁する」

「あ、ありがとうございます」

助かった。

とりあえず少女の機嫌は損ねずに済んだようだ。

大事なのは彼女を怒らせないこと。なにしろ長峰はおおきな弱みを握られているのだ。警察に駆け込まれたら、弁解のしようがなかった。

「ところで」

「は、はい」

「ここはどこ？」

「……おれの家です」

答えてから、長峰は根源にある問題に気付いた。

どうして美少女がいきなり宅配で届けられたのだ？ 段ボール箱を開けたら女の子が入っていましたなんて、正気の沙汰ではない。

「あ、あの——質問してもいいですか？」

「なによ」

「どうして、う、家に来たんですか」

「……え？」

少女は目を丸くした。

全く想像していなかった質問だったようだ。濡れたまつ毛が、青い瞳のうえにのびていた。

「あたし、ですか？」

「そ、そうです」

「わかんない」

「え？」

「だからわかんないって言ってるの。覚えてないんだもん。気が付いたらここにいたから」

少女はため息をついた。声が震えていた。

「お、覚えていないんですか」

「……ごめんなさい」

なんだこのエロゲてきな展開は。

長峰は混乱してきた。バーチャルの世界ではさも当然のようにおこっている出来事だけど、現実が発生するとなると、また別物だ。

まず青い髪に、青い瞳をした美少女。テレビに映っているアイドルでさえ、ここまで整った顔立ちをしている人はいない。

大きな瞳に、きれいな二重瞼。鼻立ちはすつと通り、まるで神様が直接手を加えたかのように完璧な比率で各パーツがそろっている。その女の子に……キスをしたのだ。それも一方的に。信じられない。長峰の両手には、胸をもんだ時の柔らかな感触がまだ残っていた。

ツインテールにした髪は肩の付近にまでのび、つややかな色を放っている。外国人なのだろうか、と長峰は思った。

「え、あの、どうしますか」

長峰は訊いた。

「わかんない」

「で、でも。困りますよね」

「あんたがどうにかしてよ。あんなに……酷いことしたのに」
それを言われると反論できない。

なにしろ暴行未遂なのだ。

「そっかいわれても……」

「おなかすいた。とにかく、どうにかなるまでお世話になることにする。条件は部屋をきれいにすること。それから、絶対私に触れないこと」

「え？ あー、え？」

長峰は何度も聞きなおす。

反射的に「え？」と言ってしまう癖があるのだが、それを超えて

疑問符が付いていた。

「と、泊まるんですか。う、う、家に」

「そうだけど」

「ほ、ほ、ほんとうですか。家に？」

「仕方ないの。外は大雪だし、自分がだれなのか分からないと、どうしようもないでしょ。私もあんたも警察のお世話にはなりたくないだろうし」

間断なく降り続ける雪の勢いはさらに強さを増し、安っぽい窓をたたいている。積雪は雪国の常だ。

「で、でも、せせ、狭いし、料理もできないし……」

「今までどうやって生きてきたのよ。私だって好きで言ってるんじゃない。一刻も早く出ていきたい所よ。こんな変態がいるところ」

少女は足元にいた等身大の抱き枕を投げつけた。

「な、ななな何するんだ！」

あまりの剣幕で長峰が怒るため、少女はしょんぼりと「ごめんなさい」と言った。深く考えずにやったことだったのだ。

一方の長峰は、また大人気もなく叫んでしまったことに罪悪感を覚えていた。ろくな人間じゃない。そういう思いが胸を占めた。

「お、お、おれだって、生活があるんだからな」

「私だって困ってるのよ」

「す、すす住むと言ったからには、どうなってもおれの責任じゃないからな。おれの、い、家なんだからな」

精いっぱいの見栄を張りながら、長峰は後ろ手に使用済みのティッシュを集めていた。こんなものは見せられない。

こうしてとある吹雪の日に、二人の奇妙な生活が始まった。

届いたものは……。 (後書き)

ほんとに短編にするつもりだったのが、なぜが連載になってしまいました。

どうなるか、まったくわかりません。

こういうのかくの初めてなので……。

至らないところもたくさんありますが、どうぞお付き合いください。
更新ペースはかなり開くとは思いますが……。

児玉 咲

長峰の顔が紅潮していたのは、暖房のせいだけではなかった。

耳たぶは赤く染まり、まるで全力疾走をした直後のように心臓が激しく脈打っている。

「……はあ」

長峰が大きくため息をつく、白い吐息が姿を現した。

肌寒いキッチンにおいておるのはカップラーメンと、久しぶりに洗ったナベに注がれたお湯だ。二人分の熱湯が用意された古ぼけたナベからは白い湯気が立ち昇っている。

近所にファストフード店はあるのだが、雪だと外出するのが非常に億劫になる。

前にスーパーで大量に購入しておいたカップラーメンのおかげで、

一冬は越せそうなくらいの食料の貯蔵があつたのだ。

「お腹がすいた」と言う少女に従って、料理とも言えない粗末な食事を作っているところである。

どこから送られてきたのかも、そもそもなぜ宅配で届けられたのかもわからないのに、成り行きで青髪の少女は長峰の家に住むことになってしまったのだ。

とにかく怪しいことこの上ないのだが、可愛いというステータスは全てを許したくなるものらしい。不思議なことに、長峰が抱くのはこれからの気苦労ばかりで、怒りとか憎しみとかいう感情はなかった。

お湯を入れて三分。

時計を確認してから長峰は、まだ少女の名前を聞いていないことを思い出した。

この待ち時間を使って尋ねたいところなのだが、どうにも勇気がわいてこない。

人に話しかけるのが苦手なのだ。最近はややくレジの店員に

しどろもどろになりながら返事をするようなことはなくなったが、それもどうせもう会わないのだからという気持ちの上でのことなのだ。

話べたな長峰が喋って、ひどく気まずい空気になることが多かった。それがコンプレックスとして深く根付いているのだ。

だから無暗に話しかけたくなかったし、これからに対する不安の中でも会話が大きな割合を占めていた。

「まだー？」

そんな長峰の思惑も知らず、少女が問いかけてくる。

ややハスキーな声。こんな声を聞いたのは高校以来だ。

「も、も、もうちょっとです」

「カップラーメンくらい手っ取り早く作ってよ」

そんなこと言われても三分は三分なのだ、と心のうちでつぶやく。

「それにしても、お客さんに対してカップラーメンっていうのはひどくない？」

「そ、そ、そうですか？」

「ホントに今までどうやって暮らしてきたのか想像もつかないな…

…俗に言うオタクの生活ってこんなに荒んだものだったなんてね。びっくり」

「はあ」

「ちゃんと掃除してるの？ あちこち埃だらけだし。その前に掃除機があるのかどうかさえ怪しいし」

「いちおう、あ、あります」

「使わなきゃ意味ないの」

とくに意識しなくても、少女のほうから話題を作ってくれるので長峰としてはありがたかった。

運ぶ時間も考慮して2分45秒たったところでキッチンから移動する。もちろん、両手に二つの容器を持ってた。

「で、で、できました」

「……お箸は？ 割り箸ないの？」

少女は差し出された長峰の箸をみて顔をしかめた。

あわてたようにバタバタと大きな足音を立てて長峰は、ずいぶん昔から置いてある割り箸を取り出してきた。

手渡ししようとする、少女が冷たい声で言い放った。

「そこに置いて。あたしに触らないっていう約束でしょ」

たしかに長峰はそう誓った。しかたなく割り箸を丸テーブルの上に置くと、少女はようやくラーメンを食べ始めた。

麺はいつの間にかふやけていて、少女の好みである硬麺からはほど遠かった。

「すみません……」

「本当なら『このウスノロ!』って叫びたいところだけど、あたしは居候になってるみたいだし、あんまり文句言えないんだよねえ——名探偵になって事件を解決できるわけでもないし」

それに変な薬も飲んでないし、と少女は付け加えた。

きっと生粋の日本人なのだろうと長峰は推測した。とてもそうは見えないが。

「そ、そ、そういうば——あの、名前、なんていうんですか？」

思い切って尋ねる。

少女の反応はいたって普通のものだった。

「あたし? 児玉咲^{こたまたき}」

「児玉……さん」

「あたしもあなたの名前知らない」

「長峰——です」

「平凡な名前ね」

そう言われても名字は変えようがないのだ、と長峰は心のうちでつぶやいた。

「ところで、長峰……さん? はいま何歳なの」

少女——咲は「さん」を付けるか迷ったが、いちおう長峰のほうが年長者であるため敬意を表すことにした。

「お、おれは、いまつ、29です」

「彼女いない歴〃年齢〃29というわけね」

確信したようにうなずく咲。

「事实は事実なのだが、何の根拠もなく断言されたことで長峰のプライドは少なからず傷ついた。」

「まったく、いい大人がこの年で何をやっているんだか」

まだ高校生くらいに見える咲は大げさに嘆息した。

「抱き枕なんかより、本物を抱いたほうがずっとマシでしょうに。情けなくならないの？」

「どうやらこの異常な環境に慣れてきたせいかな咲は素顔をさらけ出しつつあるようだった。」

長峰は咲の端正な顔立ちと、ざっくりした性格のギャップに驚きつつも、ラーメンを口に運ぶ。

「女性と食事するのは母親以来二人目だ。小学校の時、強制的に机をくつつけさせられたのを除けば、だが。」

「そ、そ、それは……」

したくてもできないのだ。

「だから性欲が余って、さっきみたいに馬鹿げたことをしちゃうのよ」

咲はどうやらその話題につなげたかったらしい。相当根に持っているのだろう。

長峰は今更ながら何も考えずに飛びかかってしまったことを後悔した。普段は度胸なんてないくせに、変なところで思い切ってしまうものだ。

「いい？ あんたは犯罪未遂者なんだからね。あたしはそれを好意で黙ってあげているの。この意味がわかる？」

「は、は、はい」

つまり、自分に従えということか。

あつという間に優位な状況を失ってしまった長峰は、スープを飲み干すことで気を紛らわそうとした。効率的なカロリーの摂取だ。

「そんなに脂っこいものを飲んだら太るでしょうに。だからメタボ

腹なのよ」

長峰の体重は標準をオーバーしている。

小太り、といったところだろうか。咲にしてみれば信じられないようなことである。

「あたしも自分がどんな食生活だったのか覚えていないけど、少なくともラーメンのスープを飲み干すようなことはしない。3食それだったら、確実にアウト」

忘れていたが、咲は記憶喪失なのである。そのせいで「この家に住む」などと言い始めたのだ。

どこかで歯車が狂いだした、長峰はそう感じていた。

「それにしても——貧乏なんだか、リッチなんだか分からない部屋ね。テレビは大きいし、なんだかすごそうなパソコンは置いてあるんだけど、食事はカップラーメンだし。服だってボロい」

趣味に金をかけるとちぐはぐな内装になるのだ。それに食事や服は節約しているわけではなく、単に面倒くさがって整えないだけなのである。

貯金をおろせば新車を一台買うくらいは余裕だし、親からの仕送りもある。生活する分には全く問題がなかった。

「お、お、おれは好きなことをしているんだ、だ」

「好きなこと？」

咲はごちそうさま、と言った。

「なによ、それ」

「ぱ、パソコンとか、か、げげげ、ゲームとか」

「つらい現実から逃げているだけじゃない、そんなもの」

咲は立ち上がると、掃除機はどこ、と訊いた。

「ろ、廊下にあります」

「そう。じゃあ掃除から始める。あたしも綺麗好きなわけじゃないけど、こんな埃っぽいところで暮らしていたら死にそう。長峰は雑巾がけてね」

はやくも「さん」が取れた。

あつげにとられる長峰をよそに、咲は手際よく掃除を始めたのだっ
た。

児玉 咲（後書き）

気まぐれに続きます。

ラノベ風に……できたらいいな。

オンライン・ゲーム

冬の水道水は身を切るように冷たい。

夏はあんなにも生ぬるく感じるのに、雪の降る季節になるとまるで雪解け水をそのまま流しているのではないかと思うほどの温度になる。

バケツがなかったので洗面器いっぱいに張った水から雑巾を取り出すと、長峰は力を込めて絞った。

「ほら、まだ終わってないから」

少女——咲がそう声をかけると、長峰はくたびれた様子で床を磨き始める。

掃除機の駆動音はあたりの雑音をすべて飲み込み、うるさく耳に響く。うつすらと埃の積もっていたフローリングは輝きを放ち、部屋の風景を全く違ったものにしていた。

「雑巾がけは隅から隅まで。心をこめて。これ基本だから！」

「は、はははい」

「こんな寒いところだからゴキブリなんていないだろうけど、汚れてるとクサレガミが来るかもしれないし」

「うちは銭湯じゃないぞ、と長峰は心のうちでつぶやいた。

そして確信する。児玉咲は生粋の日本人であると。

「液晶だけはきれいなのにね」

咲がパソコンの画面を覗き込みながら言う。

一日の大半をパソコンに向かいながら過ごしている長峰にとっては、指紋で画面が汚れているなど言語道断の行為だった。

「……これで、リビングだけはどうにかなったかな」

咲が満足げに長峰の部屋を見回す。

狭いアパートとはいえ、家賃が高いだけあって風呂やトイレも完備してある長峰の部屋だから、リビング以外にも綺麗にしなければいけない個所がある。

だがとりあえず生活の起点であるリビングの見栄えを良くしたことで、咲は心が満たされる思いだった。

「……あ！」

時計のアラームが鳴ると同時に、長峰が焦ったような声をあげた。あわててコンピューターに飛びつくと、高速でキーボードをたたき始める。咲が後ろから覗き込み、訊いた。

「なにやってんの？」

「お、お、オングのイベントがあ、あるんだ」

「オング？」

「オンラインゲームの、の、こと」

「ああ、なるほど」

咲は納得したように膝を打った。

「それで、イベントって？」

「おおお、大きな大会があ、あるんです。おれ、おれは副マスターだから、ら」

「副マスター？」

咲にはわからない単語が次々と出てくる。そのたびに咲は質問した。長峰は手を休めずに答える。

「ぎ、ギルドっていう、集まりがあつて。お、おれは、二番目に偉い、地位、なんです」

「ふーん」

それってすごいの？

「ひゃ、百人近く所属している、ギルド、だから、わりと」

「なるほど、会社でいえば副社長なわけね。それにしてもなんだか面白そうなゲーム」

「お、お、面白いですよ」

「ねえ、あたしにもやらせてよ」

咲が提案するが、長峰は即座に否定した。

「い、い、今はちょっと無理です。ここに、これからい、イベントがあるから」

「……ふーん。つまーんないの」

鼻を鳴らす咲。長峰は取り繕うように「あ、あ、あとでなら、べべ別にいいですから」と言った。

咲は長峰のベッドに寝ている抱き枕をひょいと抱えあげると、整えられたシーツの上に転がった。先ほどの掃除できれいにしたばかりだから、不潔な感じはしなかった。

長峰はそんな咲の様子に目もくれず、せわしくマウスを動かしたり、文字を打ち込んだりしている。

彼の額には脂汗が浮かび鈍い部屋の照明を反射していた。

「ねえ、それってそんなに面白いの？ あんたが必死になるくらいに？」

咲は少し拗ねたような様子で尋ねた。

長峰は自分のキャラクターである「ガイオン」を操作しながら答える。

「はい」

「なんで？」

あまりに抽象的な質問で、長峰はなんとはいいいのか分からなかった。

わずかに手をやすめ適当な回答を探す。

「げ、げ、現実では相手の顔色をうかがったり、いろいろ大変だけど、ど、ここではそんなことを気にせず、い、生きられます。そ、それに、こんな風に、ど、どすることもないし」

「じゃあ、携帯でいいじゃない」

あっけからんと言つてのける。

「あたしはあんたがどもることなんて別に気にならないし、文字がいいなら他の物を使えば済む話でしょ。働きながらだってメールはできる。それにそのゲームだって、いろんな人と遊んでいるなら気を使うこともあるんでしょ？」

「そ、そ、それは……」

そんな風に考えたこともなかった。

たしかにネットゲームでも人間関係は存在している。ギルドのリーダーは頼れる人だが、ほかの副リーダーの一人とは仲が悪い。イベントに出られる、出られない。そんなことでさえ地位が上下する。だが現実では手に入れないものを、たくさん経験することができたのも事実だ。

努力すればただけ強くなれる。数字で表示される経験値は、長峰を裏切らなかつた。

それに友達や、仲間といった者もいる。顔や体形で差別されることも、それを引け目に感じることもないのだ。だからこそ、ありのままの自分でいられた。

「げ、げゲームは人を楽しませるためにあ、あるから。だから、こんなせ、世知辛い世の中よりも、ず、ずっと楽しいんです」

「ふーん」

咲は腕を組んで、天井を見上げた。

大きな瞳は薄汚れた壁をとらえ、そして閉じられる。

暖房が風を吐き出す。閉じられたカーテンの向こうで、吹雪が窓をたたきつけていた。

「どんなイベントなの？」

不意に咲が訊いた。がバリと起き上がると、長峰の後ろに回りパソコンを覗き込む。

「きよ、きよだいなモンスターがあちこちにでてくるんです」

「それだけ？」

「で、でも、すごく強くて、荒稼ぎできるから、大切なイベントなんです。あ、あ、ある程度倒すと、さらにすごいやつがでてくるって、いう、噂もあります」

「そいつをみんなで倒すわけね」

「ぎ、ギルドのメンバーで、集まって、倒します」

「つまりラスボスなんですよ」

「そういうわけです」

面白そうね、と咲は言った。顔がニヤリとなる。

いやな予感がした。それも、雑誌の表紙になりそうなくらい満面の笑みを浮かべている少女によってかき消された。

「最初のほうは弱いんでしょ？ だったらあたしにもやらせてよ」

「そ、そ、そんな初心者にできるようなもんじゃ……」

やっぱりそうだ。あれは悪だくみをしている表情だった。

はつきり言つて、長峰ひとりが初心者プレイヤーにすり替わったところで結果は変わらないだろう。最強の装備でそろえた防具と武器は、並大抵のことでは覆らない。

「仲間もいっぱいいるって言ってたじゃん。だから大丈夫よ」

「え……いや……でも」

「ほんの少しだけだから。いいじゃん、ケチケチしないで」

強く言われると、長峰は弱みを握られているから反論しにくい。理性の吹っ飛んでしまった行動はやはり、ロクな結果を招かないのだ。

「……え、えーと……」

「ああ、もう！ やると言ったらやるんだから！ ほら、貸して」

咲は長峰と薄いノートパソコンの間に割って入ると、目を輝かせた。長峰以外の人がこのパソコンを使うのは初めてのことだった。細く、白い指がぎこちなくキーボードを操作する。

「で、やり方は？」

「え？」

「やり方。どこをそう押せばいいの？」

「……………」

どうしようもない。長峰はこれ見よがしにため息をついた。

咲のうなじが目に入る。突然、後ろから抱きすくめてしまいたい衝動に駆られた。きれいな首筋だ。きめ細やかな肌の上で黒いほくろがぼつかりとたたずむ無人島のように浮かんでいる。

いや、だめだ。

そんなことはしちやいけない。

さっきの反省をもう忘れたのか？ 喉元過ぎれば熱さを忘れる。ということわざを思い出した。

今まで、何度おなじ後悔をしてきたことだろう。

そのたびにもう二度と繰り返すまいと決意して、やがて苦渋はは忘却の果てへと追いやられるのだ。

「こ、ここ、ここをクリックして、ダンジョンに行くんです。そうしたら、大きなモンスターと、味方のギルド員が、がいますから、ら。モンスターを見つけたら、こ、攻撃してください」

「了解！」

意気たかだかに咲が両手を突き上げると、拳が長峰のあごにヒットした。

まるでプロボクサーが放ったかのように美しいパンチだった。

後ろを振り返り、眉をしかめた咲が言う。

「あたしにさわんないで、って言ったでしょ」

痛むあごを押さえながら長峰は、このままじゃ奴隷にされそうだと内心でつぶやいた。

オンライン・ゲーム（後書き）

不定期に続きます。

討伐デビュー

ガチャガチャ。

カチカチ。

ガチャガチャ。

カチカチ。

……長峰は不安そうに画面を覗き込んでいた。咲の操作はいかにも素人丸出しといった風で、教習所の教官ができの悪い生徒を見守っているような面持ちだ。

ゲームの中では巨大な甲殻獣のまわりを米粒のような狩人たちが包囲している。

めいめいがボウガンや太刀を手に、モンスターを攻撃しているのだ。赤いグラフィックや閃光がとびかい、少し目がクラクラする。

誰かが発射した弾丸が甲殻獣をなぎ倒す。大砲のような巨大さだった。

まるでぶりきの兵隊たちによる戦争。血に飢えた暇人の遊び。

咲はこめかみを押さえると、ゲームに向き直った。ここからが正念場だ。

「あ、あ、あと少しですから、が、頑張ってください」

「わかってるわよ。こいつの動きがおかしくなってきたみたいだから、かなり弱ってるんでしょ？」

巨獣の足はふらつき、いまにも倒れそうだった。

必死に尻尾や両脚をふるっているが、背中から飛び出たトゲはほとんどが破壊され見るも無残な姿になっていた。

誰の目からしても衰弱しきっている。

「そ、そうです。もうちょっとです」

長峰はエールを送った。咲は画面に指を突きつけると、

「いっけえ！ 超電磁砲！」

むろんそんなものは存在しないし、しかもパクリな気がしなくもないのだが、とにかく咲は叫んだ。

ちようどいいタイミングで誰かの放った弾丸が命中する。

悲鳴のような声をあげながらモンスターはゆっくりと横たわった。地響きがやむと先ほどまでの喧騒がうそのようにおさまっていた。

「よっしゃあ！」

およそ女の子らしくない歓声をあげる。

長峰も一緒になって喜んだ。久しぶりの感覚だ。

小さなガッツポーズをする。画面いっぱいにはギルドメンバーからの賛辞の聲が届いていた。お世辞臭いものも多いが、ここは素直に喜んでおくべきだろう。

「ねえ、見てみて！ みんなあたしのこと褒めてるよ！」

満面の笑みで咲が長峰をかえりみる。

なんだか心が熱くなった。自分が倒したわけでもないのに。

「こ、これは、おれのことを、を、ほ、褒めてるんです」

「ほらこれ『相変わらず素敵な剣さばきでした！』とか『強いですね』、乙です』とか。ねえ、乙って何？」

「お、お、お疲れさまっていい意味です」

少なからずシヨックを受けながらも長峰は気丈に返答した。素敵な剣さばき？ それに値するのは咲の百倍くらいの技術だ。

「やっぱりあたし才能があるのかも」

「あ、そ、そうですね」

「じゃあ、次のやつを討伐しに行きますか」

「え、ちよ、ちよっと待って」

「何よ？」

「い、一回だけって約束じゃ……」

咲はちよつと考える様子を見せた。青い髪が柳のように揺れた。

「それは昔のあたしがした約束。今のあたしには関係ない」

「そんな——」

暴論があるものか。長峰がどもりながらも論破しようと身構えた

き、咲は冗談よと言った。

「さすがにそこまで非常識な人間じゃないし。やりたいただけやれば？」

欠伸をしながらベッドに倒れこむ。

まだ温もりの残るパソコンの前のクッションに長峰は腰を下ろした。
「あたしはちよつと疲れた。このゲーム意外と体力使うみたい。あんたよく長時間プレイできるね。目が痛い」

たしかにパソコンの画面を見ているだけでも相当な負担となる。その上ゲームということさら集中力を要する使い方をしていたのだから目が疲れるのは当然だ。

長峰でさえある程度の休憩を取らなければいけないのである。咲が倒れこむのも無理はなかった。

瞼をゴシゴシこすりながら咲が言う。

「今は楽しかったけどさ、これを毎日繰り返すとなると飽きがきそう。別にあんたを馬鹿にしているわけじゃないけど、少なくともあたしはそう思う。ゲームなんてやったの久しぶりだろうし、何にも思いついてないけど」

「げげ、ゲームだって生活のいち、一部になればあ、飽きません。そ、それに普段の生活だってお、同じことの繰り返しですし、し」
「それもそうなんだけどさ」

欠伸をする咲。

「寝る。あたしが起きた時に変なことしてたら今度こそ牢屋の中にぶつ飛ばすからね。それに死刑。ム所から出てきた瞬間、雪の下に埋めてやるわ」

「わ、わかりました」

咲は目をつむると、そのまま静かに寝息を立て始めた。まるで人形みたいに。

急に静かになってしまったな、と長峰は思った。いつもの時間に戻ったただけなのに少しさみしさを覚えていたのだ。

パソコンの奥では戦士たちが命を賭して戦っている。

それを操るのは小太りの男。暖房のきいた部屋でもくもくと操作に励むのだ。

咲が来たことで荒野に春が訪れたかのように部屋全体が華やいだような気がする。顔だけじゃなく、性格也大いに関係しているのだろう。明るく、勝気で、長峰とは正反対の気質なのだけれど歯車が噛み合わさるかのようにつまく回っている。

このままなら、と長峰は考える。

世間一般ではニートという存在は軽視され、さげすまれている。

ニースだって新聞だってそうだ。メディアの情報操作によってまるで日本の癌であるかのような扱いを受ける。

黒人が奴隷であつたように、現在ではニートに人権がない。そんな風に思えてしまうくらい周囲の目は冷たく、いつも笑われている気がしていた。

街を歩けば女子高生のクスクスというささやき声が聞こえる。どこかで起こった馬鹿笑いも、ただすれ違っただけの通行人の視線でさえ長峰を責めているみたいだった。

実際にはそんなことなどないのだろう。

たとえばとりとめもない学校での話だったり、くだらない下ネタで爆笑していたり、前からやってくる人を確認しただけだったり、そういう当然なことなのだ。誰も長峰を意識していない。馬鹿にしようとなんて思っていない。

わかつている。半分はわかつている。いや、もっとわかつている。

それこそ完全なくらい。

しかし根深く寄生した疑心と恐怖が色眼鏡となって世界を変えてしまふのだ。より醜悪で、敵意的なものに。

「けど」

咲を足掛かりにすることで、普通の人間くらいには戻れるかもしれないのだ。

基本的人権。『健康で文化的な最低限度の生活』だ。

いやむしろ、咲が自然に長峰を変えていくだろう。彼が望むかどうか

かなんて関係なしに。咲の世界へ引きずり込むのだ。

また一匹、巨大なモンスターを討伐することに成功した。

今度はプテラノドンとドラゴンを足して二で割ったようなやつ。最後は翼を破られ地に落とされたままとどめを刺されたのだ。哀れな末路だった。

もしこんな風に自分の本意ではない最期を迎えるのだとしたら、誰もがその未来を変えたいと思うだろう。長峰とて例外ではない。結婚だってしたかった。彼女もほしい。みんなの尊敬を得たい。幸せだと胸を張って言えるようになりたい。

咲には強がってこれはこれで楽しいのだというようなことを言っていたが、そういう平凡だけど自分で納得できる人生を送ってみたという願望は長峰も持っているのだ。

「……はあ」

どうしてだろう。

楽しいはずのゲームなのに、今日は色あせてしまったようだ。

大規模な討伐クエストは大事なイベントだ。長峰もこの日に向けてアイテムを新調したり、こまめに連絡を取り合ったりして備えてきた。

長峰はサッカーの試合に臨む少年が夜の公園で練習するような必死さで準備したのだ。

ギルドのリーダーの信頼だって勝ち得た。他の副リーダーたちとの差別化を図る絶好の機会だったし、これを機にギルド員たちを掌握しようとも思っていた。

「……だが、しかし。」

咲が来た。

春が訪れるよりも唐突に、段ボール箱に入っただま。

これでいいのだろうか、と思う。

ゲームなんて所詮はデータの集合なのだ。管理者が少し指を動かすだけで長峰よりもはるかに強いキャラクターが出来る。途方もない時間をかけて築き上げたものはあっという間に追い抜かされて

しまう。

むろん、それは現実だって同じことだ。

いくら努力したって報われない事例は石ころのようにそこらじゅうに転がっている。

金だってただの紙切れだ。サラリーマンの一生分の給料を一枚の宝くじで稼いでしまうこともできる。

どちらが幸せかと尋ねられれば、どちらも同じだと答えるだろう。

実世界で失敗してしまったからバーチャルな空間での再起を図ったのだ。もう一つの生活。虚像なわけじゃない、きちんとそこに存在しているのだ。

それでも——胸のどこかで疼く虚しさが、時々針のように突き刺さる。

「うん……」

咲が寝言をたてながらもぞもぞと動く。

そんな様子を見ているうちに長峰のアバター『ガイオン』がふっ飛ばされていた。体力もだいふ少なくなっている。

集中力が欠けているのは明らかだった。

なにかが変わり始めている、それも長峰のなかで。

身の丈以上もある大剣をふるいながら戦うガイオンを眺めて、長峰はどこから現れた違和感をつかもうとしていた。

討伐デビュー（後書き）

どうにも明るくなりきれません……もっとテンションあげていかな
いと……。

理由（前書き）

遅くなりました。

理由

気がつくと、夕日がカーテンを紅色に染め上げていた。

どうやら雪はやんだらしい。すっかり雲のなくなった空を見上げ、長峰は思い切り背筋を伸ばした。長時間、同じ姿勢でいたために少し腰が痛んだ。

結露に濡れた窓辺から、ひんやりとした冷気が伝わってくる。冬で、雪国なのだ。窓を開ければ凍えるような空気が入り込んでくることだろう。

長峰は欠伸を一つすると、ベッドで寝息を立てている少女を見やっ

た。
オンラインゲームのイベントは大成で幕を閉じた。ゲーム内で最大の勢力を誇る長峰たちのギルドが圧倒的な成績を残し、さらにラスボスを出現させることにも成功したのだ。

あまりに巨大で、全貌はそれが登場したときのムービーでしか拝めなかったが、伝説と呼ぶにふさわしい強さだった。

プレスに焼かれればもちろん、踏みつぶされるだけでも即死だ。数に任せて押し寄せたギルドメンバーたちも次々と倒されていったが、時間ぎりぎりで何とか仕留めることができた。最後まで残り勝利を噛みしめたのは全体の十分の一にも満たなかっただろう。それでも討伐には成功したのだ。

その見返りが凡庸なものであるはずもなく、数日後にはレアアイテムが送付されてくるというメールが届けられた。

——久しぶりに胸の熱くなる戦いだった。

一心になって武器をふるい、援護し、突撃する。心が通じあっているかのように連携して徐々に敵を追い詰めていく様は圧巻だった。言葉がなくても、各自が役割を把握し全力でその責任を果たそうとする。長峰の小さな違和感などふっ飛ばしてしまうほど、鼓動を高鳴らせる展開だった。

その間も、咲はずっと静かに眠っていた。

長峰の日常と違う点は、段ボール箱で届けられた少女がいることだけだった。それ以外は、何も変わってはいなかった。

さて、と長峰は思う。

そろそろ夕飯のことを考えなくてはなるまい。長峰一人だけならカップラーメンで済ませるところなのだが、また咲が文句を垂れるだろう。次は吠えるだけじゃ済まない気がした。

「あの……」

恐る恐る声をかける。

おそらく咲は寝起きが悪いだろう。予感にすぎなかったが、確証じみた自信を長峰は持っていた。

わがままで、お転婆な少女なのだ。すんなりと起きてくれるようなキャラじゃない。

「お、起きてください」

長峰は咲を揺するうとして伸ばした手をひっこめた。

『あたしに触らないで』という咲の言葉がありありとよみがえってくる。長峰の犯した罪に相応の罰だろう。本来なら、もっと重い処罰を受けてもおかしくはないのだ。それほどのことを、長峰はしてしまった。

咲は唸りながら寝返りを打つ。

青い髪に隠された横顔はたまらなく美しく、そしてあどけなかった。まるで赤ん坊のように無防備だ。

どうしてこの少女はこんなに無警戒なのだろう、と長峰は思った。

初対面の男をどうしてしんじられるのだろう。

「あの……」

「うーん……」

仕方ない、ネットで夕飯の献立を調べるか、と長峰が重い腰をあげると玄関のチャイムが鳴らされた。誰だろう、と首をかしげる。またおかしなものが配達されるのではないだろうな。これ以上人が増えるようでは、長峰の頭がパンクしてしまう。

慌ただしい足取りで長峰は玄関に向かった。廊下はきれいに掃除され、いつもは床に転がっているはずの雑誌やガラクタなどが端に寄せられているため、スムーズに移動ができた。

冷たいノブに手をかけて、長峰はふと考えた。念のために、外にだれがいるのかを確認しておこう。男の一人暮らしを狙うような泥棒はいないから普段は何の警戒もせずにドアを開けるのだが、今日ばかりはすこし神経質になっているようだ。

のぞき穴から外の様子をうかがう。
なぜか人影はなかった。古臭い廊下の錆びついた手すりが見えたが、そこに人の痕跡は残っていなかった。

チェーンロックをかけながら、ゆっくりとドアを開ける。やはり誰もいない。

長峰の耳に、何者かの足音が聞こえたような気がした。左の方向だ。急いでチェーンを外し、周囲の状況を把握しようとする。気分はFBIだ。スパイに侵入されかけた。至急ターゲットを捕獲せよ。
だが長峰の瞳に映ったのは、一面に広がる雪景色だけで、あとは何も真新しいものはなかった。

首をひねりながらネットに向かいなおす。

誰だったのだろう。今日は奇怪なことばかりが起こる。

数分後、長峰が手軽に作れるリゾットのレシピを眺めているとベッドで寝ている咲が苦しそうな声をあげ始めた。

「ど、ど、どうしたんですか！」

咲は答えない。

息苦しそうな呼吸で、しきりに姿勢を変えている。

額には大きな汗の粒が浮かび、顔も赤みを帯びていた。

「熱があるのかもしれない」

長峰が咲のおでこに手を当てると、すぐに普通でないことが感じられた。平熱以上だ。

どこにやったのか覚えてないくらい昔に使った体温計を荷物の奥のほうから探し出してみると、それを咲の脇下に入れた。この際、触

ったとか触ってないとかは関係ない。

長峰の胸中は、あせりと心配でいっぱいだった。

「……どうしよう」

まるで列からはぐれてしまった小学生のようにうろたえる。

風邪だろうか。ほかの病気の可能性も頭をよぎる。突然の発熱なのだ、なにか悪質な病気かもしれない。

考えれば考えるほど泥沼にはまって、さらに混乱する。

家に風邪薬はない。あるのは腹痛を抑える薬だけだ。買いに行くとすると近所のスーパーまで行かなくてはならない。

なるべくなら外出はしたくなかった。人が怖いのだ。

どこを歩いていても笑われている気がする。指をさされあざけられているように思える。みんなが長峰を馬鹿にしているのだ。

そんなのは勘違いだと言いつ聞かせても、外の空気はバンパイアにとつての太陽みたいなもので、長峰の心を弱らせた。わざわざ嫌なことをする必要がどこにある？

でも——、と思う。

自分のためじゃなくて、誰かのためならば、きっと理由なんていないのだ。

長峰は玄関に置いてあった鍵をつかむと、靴下もはかないままスニーカーを引っ掛けて飛び出した。

理由（後書き）

もうチヨイ更新を頑張らないと。
間違っただのここに投稿してしまったのは秘密。

そこの世界

震える手で鍵を閉めてから、長峰は傘を持っていないことに気付いた。

だがそんなものを取りに行く余裕はない。薄い部屋着は雪を浴びて早くも冷たくなり始めていた。部屋の中からはわからなかったが、パウダーのような粉雪が静かに降っていたのだ。

裸足ではいたスニーカーが積雪の上を踏みつけるたび、体温に触れた雪解け水がしみ込んだ。

最も近いコンビニまでは徒歩で十分ほどだ。小さなものだが、風邪薬くらいは売っている。長峰はここを良く利用していた。生活用品をそろえるにはもう少し遠くにある大手の百貨店のほうがいいのだが、近いこともあって、多少値段が高くついてもそのコンビニに通っていた。

目をつぶっていてもたどりつけそうなくらい、慣れ親しんだ道だ。コンクリートに積もる雪の上を走り抜ける。ブロック塀の向こう側には重たそうにかしいでいる庭木が見えた。

あまり都会的ではないこの場所で、すぐ近所にコンビニがあったのはラッキーだった。いちいち病人が出るたびにフェリーで本土まで行かなければならない離島とは雲泥の差がある。

だがしかし、長峰の体力はそう長く持たなかった。

道のりの半分も行かないうちに息がきれ始め、動くのがつらくなってきたのだ。心臓は咲と会った時とは違う種類の激しい鼓動を刻み、長峰を制止しようとしていた。

心臓はハートの象徴だとされているが、必ずしもそうではないらしい。はやる心とは裏腹に全身の血管は破裂しそうなくらい膨らんでいる。

立ち止まってしまいたい。体中が熱いのに耳だけが冷氣に毒されて痛いほど冷たくなっていた。

昔から走るのは大の苦手だった。体育の授業ではいつもビリ。それがいやで体育があるときは、いつも保健室で休んでいた。保健の先生は結構美人だったから、薬品臭いベッドに寝そべりながら、ピンク色の妄想にふけっているとふとした拍子にとてもくだらなく感じられて、自分が嫌になった。

そういうこともあったし、日ごろからトイレとパソコンの間くらいしか動いていない長峰に体力があるはずもなく、咲のために走ろうという気力も段々と失せてきた。

スピードが落ち、ついに足が止まってしまふ。そこで長峰は外気の冷たさに改めて身震いをした。

……これでもいいのか？ 自分に問いかける。

いいはずはなかった。答えは決まりきっているのだ。

長峰は道に積もる雪を一つかみ拾い上げると、それを月の石でも眺めるかのようにまじまじと観察した。冷たい。雪は冷たく、氷のようになっっていた。

雪が冷たいのは当然なのだけれど、長峰が咲を助けなければならぬのは当然なのだろうか。

咲は勝手にやってきて、かつてにふるまって、かつてに病気になったのだ。それなのに、どうして長峰が助けなければいけないのか。違う、そんなことじゃない。

目の前で苦しんでいる少女ひとりすら助けられないなら、いったい何のために存在しているのか。

少年漫画のようなカッコいい主人公でないことはわかっていた。特殊な能力を持っているわけでも、誰かと戦えるわけでも、地球を破壊から救えるわけでもないのだから。

ただそれでも。

長峰は人間なのだ。

人としてのプライドは捨ててはいない。

たった一人の苦しんでいる少女も救えなくて、なにが人間だ。走るのがつらい？ ふざけるな！

お前はそうやって逃げてばかりいる。今の生活にたどり着いたのも、いろんなものから逃げた拳句の結果なのだ。

人が怖い。働くのが怖い。つらいのが怖い。生きるのが怖い。

誰も見ていないところでは馬鹿みたいに意地を張るくせに、外へ出ればミミズのように無力だ。いや、無力などではなく――長峰のほうから背を向けてしまうのだ。それが身を守る方法だから。

そんな情けない姿を誰が望むだろう？ 長峰だって変われるものなら変わりたいと願いつけてきた。だが主人公になれないこともわかってた。だから苦しかった。

コンビニまで走る。簡単なことじゃないか。息が上がり、膝が震えそうになるのをほんの少しこらえればいいだけなのだから。

咲の顔を思い出す。熱っぽく赤く染まった表情は苦しそうだった。だから長峰は再び立ち上がった。深呼吸をして走りだす。誰かを助けるために。それがたとえ、だボールで運ばれてきた少女だったとしても。

風邪薬はすぐに見つかった。

暖房のきいたコンビニのなかはやけに熱気がこもっていて、それに比例するように人の数も多かった。二つしかないレジの前には長い列ができており、それがちつとも進まないのだ。

どうやら片方の店員がまだ新人であるらしく、レジの作業がたどたどしく打ち込むスピードも遅い。もう片方がどうにか新人をフォロ―しようとして頑張っているが、いかにせん一人だけでは限界がある。

列の後ろのほうに並びながら長峰はいらいらしていた。

値段ぴったりの小銭は用意してあるし、あとはそれを渡しさえすればいいのだ。

それなのに今日に限ってカタツムリが散歩するようなスピードでしか進まない。これは罰なのだろうか。一人の少女さえ救うのをためらった長峰に対するペナルティなのだろうか。

それなら後でいくらでもうけよう。ただ今は一秒でも早く咲に薬を

届けてあげたかった。

前に居並ぶ人たちを押しのけ、レジの店員にお金を放り投げてこの田舎くさいコンビニを出ていきたい衝動に駆られる。

レシートもレジ袋もない。家に帰らせてくれ。

長峰は気付いていなかった。並ぶのに退屈した周囲の視線と興味を浴びていることに。太った男がたった一つの風邪薬を手にも、いかにも落ち着かないといった風に足をそわそわさせている様子を、それ以外にすることがないかのように熱心に、それでも気取られないように観察しているのだ。

靴下もはかないまま、コートも着ず、一心にレジのほうを見つめているこの男は何者なのだろう、どうしたのだろうか、と。

長峰はその場において明らかに異端者であり、浮いていた。それを認識していないのは長峰だけであった。

新人は焦れば焦るほど、作業が遅くなっていく。それにつられるようにして、もう一人の店員も気持ちが悪回りしているようだった。

時計の針は容赦なく歩を進めていく。長峰は舌打ちをした。

その時、長峰の前にいた女性が口を開いた。

「あの、ひよつとして、急いでいらっしゃいますか？」

「え？」と反射的に問い返す。

「えと、その、急いでますか？」

たぶん大学生くらいの年齢だったろう。分厚く着込まれたコートやなんやであまり細くは見えなかったが、それでも顔はほっそりとしていて、おとなしそうな雰囲気がかがえた。

長峰の苦手な茶髪のギャルとは正反対の存在である。これなら大丈夫かな、と長峰は思った。女性は苦手だが、何とか会話くらいはできそう。咲と話をして自身が少なからずついたことも幸いした。

「え、あ、はい」

曖昧な返事を後悔したが、その女性は訊き返すこともなく言葉を續けてくれた。

「もしよかったら私は急いでませんし、前にどうぞ」

長峰の持っているものが風邪薬一つであることと、明らかに外へ出かけるための服でないことをみれば、急を要していることはだれにでもわかる。

女性が抱えているのはいくつかの菓子パンと、野菜ジュース。夕飯のつもりなのか、それとも小腹がすいたから食べたくなっただけなのか、どちらにせよさほど急いでいないことはすぐに推測できた。そのやりとりでさえも、少し煩わしく思ってしまったことを長峰は後悔した。

ずいぶんと長い間、気づくことのなかった他人の優しさを、こうも簡単に受け取っていいものなのだろうか。もつと感謝すべきなんじゃないだろうか。

だが、そんなことを考えさせてくれるほど長峰の思考に余裕はなかった。

早く咲のもとへ帰りたい。それだけを念じていた。

「あ、あ、ありがとうございます」

また、声がかすれた。

口をついたのはとても小さな声で、小刻みに頭を下げながら発した言葉は相手に届いたのかさえ怪しい。

「ぼくもいいですよ」

と気弱そうなサラリーマンが言った。

周囲の大勢と同じように長峰をそれとなく観察し、声をかけるべきかどうか迷っていたのだが、決心がつく前にすぐうしろの、それも自分より年下の女の子が先に勇気を出した。

その一言でせきを切ったように、「どうぞ」というささやかな親切が自然に、そして流れに乗るようにいくつも飛び出した。

内心では譲りたくないと思っている人さえも、空気を読まざるを得なかった。

ここで反旗を翻そうものなら雪の降り続く外気よりも冷たい視線に串刺しにされ、人の少ない田舎でさらしものにされることだろう。一期一会が基本の都会とは違って、中途半端な田舎では逆に他人の

視線というものが気になるのだ。

「あんたそれだけなんですよ。先に行きなさいよ。あたしらはどうせ今すぐ買わなきゃなんないとか、そういうわけじゃないんだからほら、誰も反対なんてしてないでしょ」

気のいいというか、後から入ってきた割に自分が主導権をにぎっているかのようなふるまいをする中年女性が、全てを決定づけた。はたから見ればあまり良い印象を与えない行動だが、長峰にはそれがとてもありがたく感じられた。

目頭がじんとする。はなをすすりながら言った「ありがとうございます」
「ます」という気持ちは、さっきの反動もあつてか、やけに大きく店内に響いた。

長峰は握りしめていた小銭をレジに置くと、シールも貼られていない風邪薬を持って飛び出した。

まだ若い、新人の店員だけがあつけにとられた表情で、長峰の後姿を眺めていた。

もつれそうになる足を必死に動かしながら、長峰は走った。

かぜがひゅうひゅうと耳元をすり抜けていく。荒い呼吸と、心臓だけが早いながらも規則正しいリズムを刻んでいた。

咲は大丈夫だろうか、という懸念が頭をよぎる。

なにしろ段ボールで送られてきたのだ。見かけは健康そのものだったが、実は重篤な病気を抱えていたのかもしれない。それならば風邪薬で間に合うはずがないのだけれど、たとえ救急車を呼んでも事情を説明できる気がなくて、なるべくなら使いたくはなかった。

明らかに不釣り合いなのだ。咲と長峰は、両極端の人間であるといつてもいい。

それが一つ屋根のもとにいるのだから、どんな余計な詮索の目を向けられるかわかったものではない。

ひよっとすると警察に事情を聞かれるかもしれない。うすぐらい取

調室で、どう経緯を説明したらいいだろう。宅配の荷物が彼女でした、なんて突拍子もない理由は受け入れてもらえるはずがない。息が切れ、足が痛くなる。

行きに走ったぶん、帰りに負担が増えていた。回復しきつてない筋肉が悲鳴をあげ、痙攣し始める。

走る。原始的なこの運動が、これほどまでにつらいとは。

長峰の頭に、音楽が流れ始める。それは運動会の曲でも、士気を高めるようなテーマソングでもなく、どこかで聞いたコマーシャルのBGMだった。単調で、いつまでも繰り返すおわりのない周期。それが逆に助けになった。いくらかつらい現実を忘れることができた。逃避とは、本来こういうものであるのかもしれない。

ようやく長峰の住むアパートが直線の先に見えてきた時だった。明らかに場違いな、がたいのいい黒服の男が道の真ん中に立っている。

彼は当然のようにサングラスをかけていた。黒い背広の肩口にはうつすらと雪が乗っていた。

ヤクザというよりも、どこかのボディガードのようだった。いわゆるSPというやつだ。本物は見たことがなかったが、ドラマやマンガで見るようなのとそっくりだった。ただ、いくらか人間らしさを感じられた。

長峰が彼の横を通り抜けようとする前に、長い両腕がピンと伸ばされた。

「な、な、なんですか……」

乱れた呼吸で尋ねる。男は、明らかに長峰を妨害していた。

「この先に行かせるわけにはいかないのです。どうかご了承ください」

「い、い、いたい……なんの、け、権利があつて……そんなことを……す、するんだ」

「ですから、何も強制しているわけではありません。これはあくまで、要請です」

要請、という言葉の裏にはあたりまえのように有無を言わせぬ圧力があつた。長峰をひるませるのに十分なほどの威圧感を、彼は持っていた。

「もうしばらくおもちください。そうすれば立ち退きます」

「お、おれは、い、今すぐかえらなくちゃいけないんだ」

「それはできません」

「よ、要請なんだろう！　だったら、そんなの、お、おれは受け入れない」

長峰の貧弱なハツタリでは、黒服はびくとしなかった。ただ粉雪が舞っていた。ほんのすぐそばなのに、一人の男が、何よりも大きな障害になっていた。

そこの世界（後書き）

ずいぶんと遅くなってしまいました。
すみません。

あと少しで完結のもりですので（1話くらいかな）、なにとぞお
付き合いください。

結末（前書き）

遅くなりました。

結末

「お、おれは、行かなきゃならないんだ。よ、よ、要請なんかに従っている場合じゃないんだ」

長峰が押し通ろうとすると、その胸をかたい腕がさえぎった。まるで錆びついてしまった部品のように、押しても引いてもびくともしない。長峰は黒服の男がかけているサングラスの奥をにらみつけたが、そこにあつたのは冷たい視線だけだった。

「私も手荒なまねはいたしたくありません。誰かを傷つけるようにとは言われてないので」

じりじりと長峰を押し戻す。

バランスを崩しそうになるのをぐつとこらえてなんとか丈夫な腕をすり抜けようとしたが、黒服の男はまるで長峰の動きをすべて見きっているかのように隙をみせなかった。

右に動こうとすれば右へ、左に動こうとすれば左へ。流れるような動作で長峰の体に付きまとう。

「くそっ！ いったいなんだっていうんだ！」

強行突破が無理であると悟ると長峰はいったん距離をとると息一つ乱れていない黒服に向かって叫んだ。

「申し訳ありませんが、お通しできないということですよ」

ちつとも申し訳なさそうに黒服が言った。長峰は手に持った風邪薬のパッケージを握りしめた。

これを届けるだけなのに、どうしてこんな屈強な人間が立ちはだかっているのだろう。映画のなかの登場人物が現れて他人の恋路を邪魔するように、長峰の些細だが大きな決意を砕こうとしていた。

「だ、だ、誰の命令でこんなことをしてるんだ！ ど、どかないなら警察を呼ぶぞ！」

から脅しにしかなくていないことはわかっていた。

声は震えているし携帯電話も部屋に置いてきてしまった。走って帰

るのだから必要ないだろうと思っていたのだ。それがとんだ裏目に出た。

「警察が到着するところには、私どもは退散していることでしよう。私たちはあなたを傷つけるつもりはありませんから、用事が済み次第すぐに立ち去ります。ただそれだけです」

黒服が発したのは無表情な言葉だった。

仕事だから、そんな理由以上にもっと確固たる信念があるような気がした。あるいは、興味がないだけなのか。

「そんなのはどうでもいい！ とにかくそこをどけ！」

「ですから、そういうわけにはまいりません」

押し通りたい、その衝動は恐怖や本能とかいったものに抑え込まれていた。こいつの横は通させてくれない。まるで鉄の巨人を相手にしているようだ。

せめて考える時間があればどうにかなる策を思いつくかもしれない。だが黒服の口ぶりからして彼女に――咲に残された時間は少ないようだ。

「何が目的だ。あの子なのか？」

黒服は黙ったまま答えようとしなかった。

おそらく凶星なのだろう。それ以外に、理由が見つからない。

「今あいつは熱を出して寝込んでいるんだ。だからおれは風邪薬を買いに行った。そ、それが、どうしていけないんだ！ ただ人の役に立ちたいと思っているだけなのに！」

長峰の心の深淵まで覗き込むならば、もつとたくさんの思いが詰めこめられているのがわかっただろう。言葉にしようとして、それを必死に喉もとで押しとどめた悲痛な叫びが。

話している時間はない。どうにかして咲を守らねば。

「……同情はいたしますが――」

「そんなものはいらない！ そこをどけ！」

「……………」

諦めたように黒服はじつと長峰を見据えた。これ以上、説得しても

仕方がない。そう判断したのだ。それは長峰にとっても同じことだった。もう言葉は意味を持たない。

どうやって相手をねじ伏せ、その先へ進むか。それだけが長峰の心を占めていた。

あまり広くない道路だったから一瞬のすきを突いて黒服を迂回しつつアパートに向かうというのは不可能だ。長峰の瞬発力では振り切れそうにもないし、かといってまともにぶつかっても弾き飛ばされるだけだろう。

何か武器はないものかとあたりを見回してみるが、あるのは雪ばかりで、雪玉を作って投げでもない限り役には立たなそうだ。

せめて棒きれでも落ちていればそれを振り回しながら突撃できるのだが。

時間がない。それが長峰を焦らせた。

黒服の落ち着き払った態度がしゃくに障る。長峰は圧倒的に不利なのだ。黒服をどうにかして攻略しないことには時間切れでゲームオーバーだ。

「あー！」と突然叫んで空を指す……が、しかし、黒服は気にするそぶりすらしなかった。UFOでもいたふりをすれば少しくらいは注意をそらせるかと思ったのだが、完全な失敗だった。

「お、おい」

長峰が呼びかける。返事はなかった。

「こ、これが最後だぞ！そこをどけ」

黒服はピクリとも動かずその肩にはらはらと粉雪が降りかかるのをじっと受け入れていた。サングラスの向こうから浴びせられる眼光だけが異様に鋭い。長峰は大きく深呼吸をするとゆっくりと距離を詰め始めた。

二人の顔が徐々に近づいていく。一歩いっば、静かだが着実に進みお互いが手を伸ばせば届く間合いに入ったとき、いきなり長峰が体当たりを食らわせた。

質量と体積は申し分のない長峰である。黒服のほうも予想はしてい

たのだろうが、思い切った攻撃をさけきれなかった。脂肪のたつぷり詰まった横っ腹にぶつかり、体制を崩す。

その様子を確認することもなく長峰はアパートに向かって一直線に駆けだした。すぐに後ろから黒服が追いかけてくる。距離はほんのわずか。長峰が隙をついた一瞬のぶんだけ開いている。

足の速さは段違いだ。ウサギとカメが競争しているかのよう。

黒服の腕がすつと伸び、長峰の襟首をつかんだ。ぐい、と後ろにのけぞる。

ここで黒服には誤算があつた。長峰の運動神経を過大評価していたのだ。

自分を弾き飛ばすだけの力があるのだから、ちよつとやそつとの抵抗では止められないだろうと思つていた。それが、引つ張つたそばから倒れこんできたのである。

長峰の両脚はとつくに疲れて切つていて、とても後ろからかけられた力に抗うだけの余力を残してはいなかった。ほとんど限界だったのだ。だから襟首をつかまれたとき、後ろに引き戻そうとする動きに逆らえなかった。その上、疲労のたまつた足がもつれ、バランスを崩して転んでしまった。

長峰にとっては幸運だった。

普段は邪魔にしかなくていない脂肪の塊が、相手を弾き飛ばし、そしてのしかかりKOさせるだけの働きをしたのだから。

「はあ……はあ……」

背中にはしたたかに頭を打ちつけ、のびている黒服の姿がある。死んではいないだろう……たぶん。

「あ、あの」

さすがに心配になつて、声をかけてみる。

「返事がない。ただの——」

と呟いているうちに、自分がしなければいけないことを思い出した。こいつにかまつている暇はない。

今度こそ、障害もなく、ただ一直線の道が長峰のまえに続いていた。

雪化粧がまるで長峰をせかすように、道の両脇に添えられていた。

もう動かない体に鞭打って階段を駆け上がると、薄汚いドアは開け放されていて、その中から先ほどと同じようにサングラスをかけた黒服の男たちが出てきた。

ぐったりとした咲は黒服たちに両脇を抱えられ、力なくうなだれていた。

「あ、あ……」

言葉が出てこない。

何かを表そうとして、それでも形をなしえなかった思いが、原始的な手段で長峰の口をついた。ただの音となって、空気と混じり溶け込んでいく。

「……あなたが長峰さんですか。なるべくなら穏便に済ませたかった」

玄関の奥からでてきたリーダー格の男が深々とため息をついた。

「ここまで来たということは、彼を押しつけてきたのでしょうか。残念ながら減給にせざるをえませんね、まったく。まあ、経費が浮くといえは多少はポジティブな考えでしょうか」

いやに親しげな口調で話しかけてくる。長峰と違って人見知りをしないたちなのか、それとも社交辞令と割り切って喋っているのか。どちらにせよ、ペースは完全に相手のものだった。

「仕方がない。見られなければさっさと退散するだけの話でしたが、こうなってしまうては説明がいるでしょう。下手に警察に行かれないでしたら面倒です」

長峰の手から風邪薬がポトリと落ちた。

こいつらは一体誰だ？ 何を言っているんだ？ どうして家にいるんだ？ なぜ咲を抱えているんだ？

疑問があぶくのように浮かんできては弾け、混乱の渦となって対流する。なにから訊いたらいいのか、そもそも長峰自身が何を考えて

いるのかも把握できず、ぼんやりと黒服の言うことを聞いていた。

「この子はまあ、いわゆるロボットというやつでしてね。体の組織やなんかは人間のものを借りていますが、脳は全くのコンピュータです。あなたは気付かなかったでしょうけどね」

あまりにも突拍子のない話。

まるでバーチャルの世界がそのまま飛び出てきたかのような。

「もともとは孤児だったのを引き受けて改造したそうです。何のためと言われれば、それはまあいろいろあるんですが、かいつまんで言えば実験です。これが実用化されればまさにターミネーターですよ。なんだってできる」

戦争も、スパイも、サービスも、人間のすることすべて。

「やつかいなのは私みたいに勝手な人間がいることなんです。それぞれの思想を持たれると、国家としては非常に不都合だ。ばかみたいな宗教にはまることも、勝手に起業して貧乏のどん底におちて文句を言うやつも、働かないまま穀をつぶすやつも、そういうものをすべて排除できたなら、明るい未来が待っていることでしょうね」
ははは、と彼は笑った。

「まあ、私はそんなの御免ですがね。仕事ですから」
さてと、と言いながら時計を確認する。

長峰は口を魚のように開けたまま棒立ちになっていた。

「最後に一つだけ教えて差し上げます。あなたの家に送られてきた彼女ですがね、自分で配達されたようです。どうしてでしょうね。ただ荷物の扱いが乱雑で、記憶を失ってしまったみたいですが」

「そ、そ、そ」

ようやく形となった言葉たちが、せきを切ったようにあふれだした。「そんなのじ、自分勝手な理由じゃないか。さ、咲を好きなように利用して、て、何がロボットだ。国民の安全を守るのが国家じゃないのか。そんなら、乱暴なことがあっていいわけないんだ。じ、人権侵害だ。いや、そ、それ以上だ。警察に言つてやる。さ、裁判所にも訴えて、まあ、マスコミにも言いふらしてやる。お、おれはそ

んなことぜ、絶対に許さないからな。か、か、必ず咲は返してもら
うぞー」

「……はあ」

もう一度リーダー格は大きなため息をついた。

「彼女は連れて帰ります。また記憶はリセットされることでしょう。
ですからあなたとのわずかな思い出なんて、これっぽちも残りはい
ません。あなたにとって彼女はゲームと同じ。ただのデータです」

「ば、ば、馬鹿を言うな！」

長峰はあらん限りの声で叫んだ。

「た、たとえ相手がデータだったとしても、お、おれの記憶や、思
い出はデータじゃないんだ！ ゲームがなんだ、それを楽しんでい
る人がいるんだ。そ、それに費やした時間は、け、決して消えてな
くなるものじゃない！ ロボットだって同じだ！ ほんの少しだっ
たけど、お、おれはずっと覚えてるんだからな！」

リーダー格は時計を確認すると、ニコリと笑みを見せた。心底うれ
しそうな表情だ。

「ところで、どうして私がこんな話をしたかわかってますか？」

「そ、それはおれに、す、姿を見られたからだろう？」

「そういつわけではありません。どうせあなたの記憶も消されるの
ですから、冥土の土産代りですよ」

「え？」

不意に、まったく気配のなかった背後から強烈な一撃を首筋に食ら
う。地面にぶつかるまでのほんのわずかな時間が目一杯引き伸ばさ
れ、スローモーションで落ちていくようだった。

「ちょうどいい試作品が見つかりました。あ、そうそう。この青い
髪の毛は、手術の後につけたものだそうですよ。髪がなくては、せ
つかくのべっぴんさんが台無しですしね」

その言葉の最後までを、長峰は聞くことができなかった。

「こんなミスをして、上は何もしないんだろぅなあ……。いやになる」と、純白の雪に向かって呟いた。「所詮は日本か」

薄暗い研究室のなかに、長峰はいた。ゆっくりと手術を施され、咲と同じように口ポットとなり果てた。手足の感覚はない。服を着せられているのが見えた。

逃げなくては。

正常な思考など存在しないなかで、その一念だけが渦巻いている。

逃げなくては。逃げなくては。

黒服にニヤついた表情が脳裏に焼き付いている。あの男から、この場から離れなくては。

ふらふらと歩いていく。

どこをどう行っただのかは分からない。手近にあった段ボール箱のなかへはいると、ひどく落ち着いた。ここなら大丈夫だ。誰も襲ってはこない。

「こんにちはー、宅急便です」

昼下がり、静かな住宅街のとある一軒家に荷物が届けられた。

昼ドラをみていた主婦がハンコを片手にドアを開け、やけに重たい荷物を受け取る。

はて、こんなものを頼んだ覚えはあったらどうかと首をひねりながらも、何かの懸賞でも当たったのかもしれないと自分を納得させて、ガムテープをはがしていく。

入っていたのは、禿げた、小太りの男だった。

ドラマのなかで誰かが叫ぶのよりも早く、甲高い絶叫が響き渡った。

結末（後書き）

すみません……めちゃくちゃ遅くなりました。

もう少し早く、それに質の高いものをご提供できれば良かったんですが……。

読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

よかったら、感想などどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9659j/>

とあるおたくの一日

2010年10月13日13時34分発行